

横山正著 『近世演劇論叢』

橘, 英哲
筑紫女学園短期大学教授

<https://doi.org/10.15017/12110>

出版情報：語文研究. 43, pp.65-67, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

横山 正著 『近世演劇論叢』

橘 英 哲

このたび、横山正氏の第二著書「近世演劇論叢」が出版された。書名にうかがえるように、演劇関係の論文・資料集の体裁をなすもので、幅広い内容を持ち、どの論も前書「浄瑠璃操芝居の研究」に引きつづいたしかな視点と方法とに裏打ちされ、読後、重い手ごたえを感じる一書となっている。以下、順に紹介させていただく。

第一部は「紀海音」、本書の「おわりに」に「当時、近松に対抗しえた唯一の浄瑠璃作者であったにも拘らず、近松に反して海音があまりにも顧みられないため、海音作品の性格などを折にふれ、筆者なりの見方で考えてきたものを最初に纏めて第一部とした」といわれるものである。第一章は「海音の経歴における作者的性格の形成」と題される。海音の幼年時代よりはじまり豊竹座作者時代まで、その周辺にあった文学的雰囲気と経歴の考察である。第二章は「海音浄瑠璃の趣向と構成」。執筆態度・世話浄瑠璃・時代浄瑠璃などの各節に分けて論じられている。はじめに全体的執筆態度が当代の資料によって説かれ、それらを証するかたちで世話・時代の各論にうつっている。その中では特に世話物に関する論考が多く、まず心中浄瑠璃で、心中への劇構成の面からと節章の面から、海音の

宝永・正徳から享保への執筆態度の変化をとらえておられる。また、そうした海音の姿勢を「大阪に生まれ、大阪の庶民の間で育った海音にして、初めて可能なことであった」として、近松との差を見ておられる。さらに犯罪物・狂乱物・執筆意識・方法・展開と影響という順に論はまとめられている。これらの論に一貫してみえるのは、他の作品との綿密な比較・検討による方法である。たとえば、狂乱物の「椀久末の松山」における一中節正本との詞章の相違、執筆意識を論ずる際の近松作品との描写の差、方法の考察中の、やはり近松作との違い、展開と影響を論ずるための「八百屋お七」「心中二つ腹帯」と歌舞伎その他の作品との影響関係等の仔細な検討である。もちろん、単なる作品同士の比較というものではない。いずれの論も、海音以前から海音以後へと変転する近世劇界の時代相を、的確に把握する結論へと帰納していくのである。世話物の最後の「心中二つ腹帯」の論などは、その意味で強い説得力を持つ。時代物にうつる。「舞台生命を早くから失ってしまった」海音の時代浄瑠璃の「それなりの理由」を考えつつ論じられたものである。その執筆態度では、他の作品との比較がまずなされる。た

とえば「信田森女占」と「しのだづま」、「小野小町都年玉」と「大和哥五穀色紙」、「新百人一首」と「三井不動明王豊年護摩」、「山樺太夫恋慕漆」と「山樺太夫霞原雀」等である。そしてこれらの詳細な比較検討より、概して世話物より成果の少なかった海音の時代物の特徴を論じられ、海音の「基本的人間性の浄瑠璃への反映」を結論とされる。次に、そうした時代物の中でも「海音の作劇法がよく効果を發揮している作品、或は彼の成熟した浄瑠璃作法の特徴をよく示している作品」として「新板兵庫の築嶋」「頼光新跡目論」を取上げておられる。海音の手法を理詰りであり理智的とされるそれぞれに緻密な作品論である。第三章は「海音の丸本書誌その他」と題される。丸本の題簽と奥書の分類による書誌的研究である。まず題簽は表記形式の分類の結果考えられる点についての論である。次に奥書は前書の「浄瑠璃撰芝居の研究」に報告されたものの補訂として述べられているもので、奥書本文と対照させた一覽表が附されている。さらに、海音作と伝えられる「業平昔物語」についての問題提起がなされている論がつづいて、第一部は終わっている。海音については、部分的には従来より取上げられることはあったにしても、このように体系的にまとめられた論をしない。ここにはっきりと具体的な形をとって照らし出された海音を見る思いである。

第二部「浄瑠璃雑纂」は、総数十一篇のそれぞれ独立した論文が集められたものである。以下に題名と簡単な紹介を列記する。I 浄瑠璃「三浦物語」の史的位置 併載、端本「三浦物語」——三浦ものの流れの中にある「三浦物語」の史的位置の解明と氏御所蔵の書の翻刻・紹介。II 筑後掾本「那須与市小桜威」の史的意義——

関連作の、文字譜も含んだ詳細な比較検討の論。III 浄瑠璃「蟬磨呂」と「蟬丸」——表題二作の関係をあきらかにした論。IV 土佐少掾の曲節——段物集その他の節章の検討によって土佐節の特徴をあきらかにした論。V 「鎌倉三代記」の成立について——書誌的研究を中心とした成立論。VI 浄瑠璃評判記序文の演劇史的意義——序文の変遷からみることでできる評判記の性格の変質を説いた論。VII 菊野殺しの実説と「置土産今繰上布」——新資料により表題関係作品を実証した論。VIII 「登八嶋」について——異本の異同の検討による論。IX 絵入浄瑠璃本「日本九ほんのじやうど」——表題作品の紹介とそれに関連する論。X 「元日金裁越」の初演時期——絵尽序文による表題作の初演時期推定の論。XI 歌舞伎番附「難波重井筒」その他について——六種の歌舞伎番附の紹介とその考察の論。以上紙数の都合で一々の詳しい紹介はできないが、いずれも実証的方法による明確な指摘がなされている論ばかりである。

第三部は「地方芸能」と題されている。I 「浄瑠璃撰芝居の変貌」はサブタイトルに——都市と地方との芸能の関連について——とあるように、従来見落されていた面の考察である。義太夫節を中心として、都市演劇と農村演劇のかかわりが、元禄期より文化文政（以後）まで史的に論じられている。以下、「現存の文弥節について」「岡山県の面浄瑠璃とその演劇的意義」「関西系面芝居圏の形成」「京都、市原の鉄扇節音頭」というように、地方芸能に関する種々の考察がなされている。

第四部は「資料」と題される。I なりひら一代記。II 元日金歳越絵尽。III 江戸桜恋英絵尽。IV 曾根崎新地五人斬口書。以上四篇であるが、I から III までは写真版による紹介、IV は翻刻とな

っている。またⅠは、第二部のⅩに取上げられたものであり、Ⅳは同じく第二部のⅦに一部引用された表題口書の全文の紹介である。

この書は「論叢」と名づけられたように、浄瑠璃・歌舞伎・地方芸能とヴァリエティに富んだ内容をもっている。まさに、氏の幅広い御研究活動の成果の一書である。私などもかつて読ませていただいた論も多いが、このように集められ、そして手にする時、一貫した方法のたしかさが伝わってくる。後学の者に幸いな、そして重い一書である。舌足らずな、また見当ちがいの御紹介ということになったかもしれない。氏の御寛恕をお願いする。

(昭和五十一年七月 清文堂 五八一頁 八、四〇〇円)

執筆者紹介

- | | |
|-------|-------------|
| 中島あや子 | 鹿児島大学講師 |
| 田坂 憲二 | 九州大学大学院 |
| 白石 良夫 | 純真女子短期大学講師 |
| 野口 義廣 | 九州大学大学院 |
| 今井 源衛 | 九州大学教授 |
| 中野 三敏 | 九州大学助教授 |
| 大内 初夫 | 鹿児島大学教授 |
| 橘 英哲 | 筑紫女学園短期大学教授 |
| 立川昭二郎 | 広島修道大学教授 |